

粘土帯土器文化の地域的様相について

宮 里 修

一 はじめに

粘土帯土器文化は朝鮮半島（以下、朝鮮）の無文土器文化を早・前・中・後期と区分したうちの後期、もしくは初期鉄器時代にあたる物質文化である。細形銅剣との共伴から早くにその編年的位置が定まったが、まとまった資料が得られず研究の不振がつづいた。その後、朴淳發（一九九三・二〇〇四）の中国東北地方起源論を契機に研究はにかに活気づく。分類・編年も再検討され（朴辰一 二〇〇〇・〇六、서길덕 二〇〇六、李和鐘 二〇〇六、李昌熙 二〇〇八）、口縁形態（円形→三角形）、把手形態（環状→三角形→棒状）、高坏形態（空芯短脚→空芯長脚→中実長

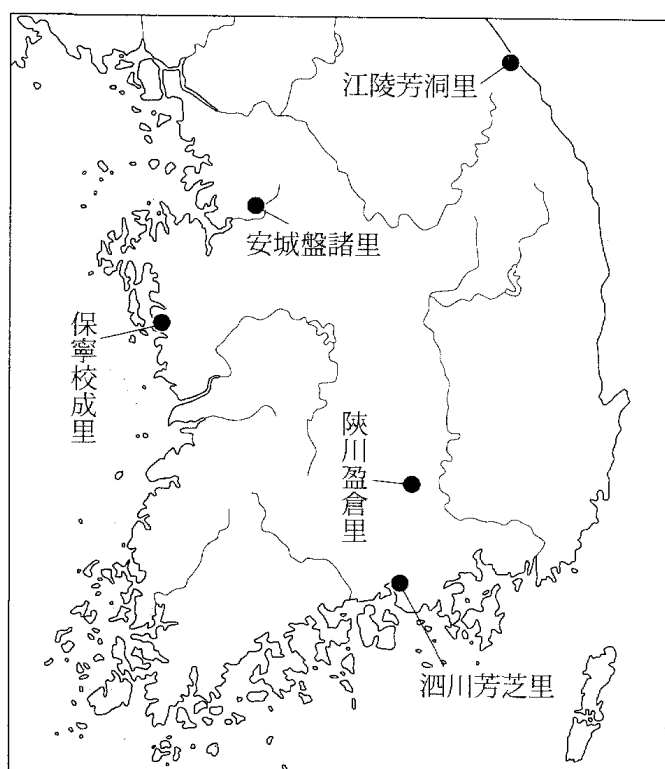
脚）が時間差を示す属性として再認識された。本稿も準じて分析を進めるが、それら属性は遺跡での在り方が充分に検討されておらず、また青銅器編年が混用されるなど、やや理念が先行している。⁽¹⁾ また、十分な批判・検証を経ないまま既成事実化しつつある集団移住・交替説を前提に、松菊里文化と粘土帯土器文化の共存モデルが提出されるなど（李亨源 二〇〇五）、⁽²⁾ 遺跡における事実の積み重ねが強く求められる状況にある。こうした状況を受け、本稿では、近年類例を増してきた粘土帯土器文化の集落遺跡のうち、集落の広い範囲が発掘された五つの遺跡に対して、集落の構成や集落内の細かな時期相、遺跡間の共通項と差異点、地域文化の継承性などを整理・確認する。

二 粘土帯土器文化の集落遺跡

校成里遺跡、盤諸里遺跡、盈倉里遺跡、芳芝里遺跡、芳洞里遺跡（第1図）についてその内容を整理する。

（一）保寧校成里遺跡（国立夫餘博物館 一九八七）

校成里遺跡は忠清南道保寧郡鰲川面校成里山五八番地に所在する。一九八六年に登山中の住民により遺物散布地が発見され、一九八六・八七年に国立夫餘博物館と国立公州博物館が合同で発掘調査を実施した。遺跡は標高一八八mの



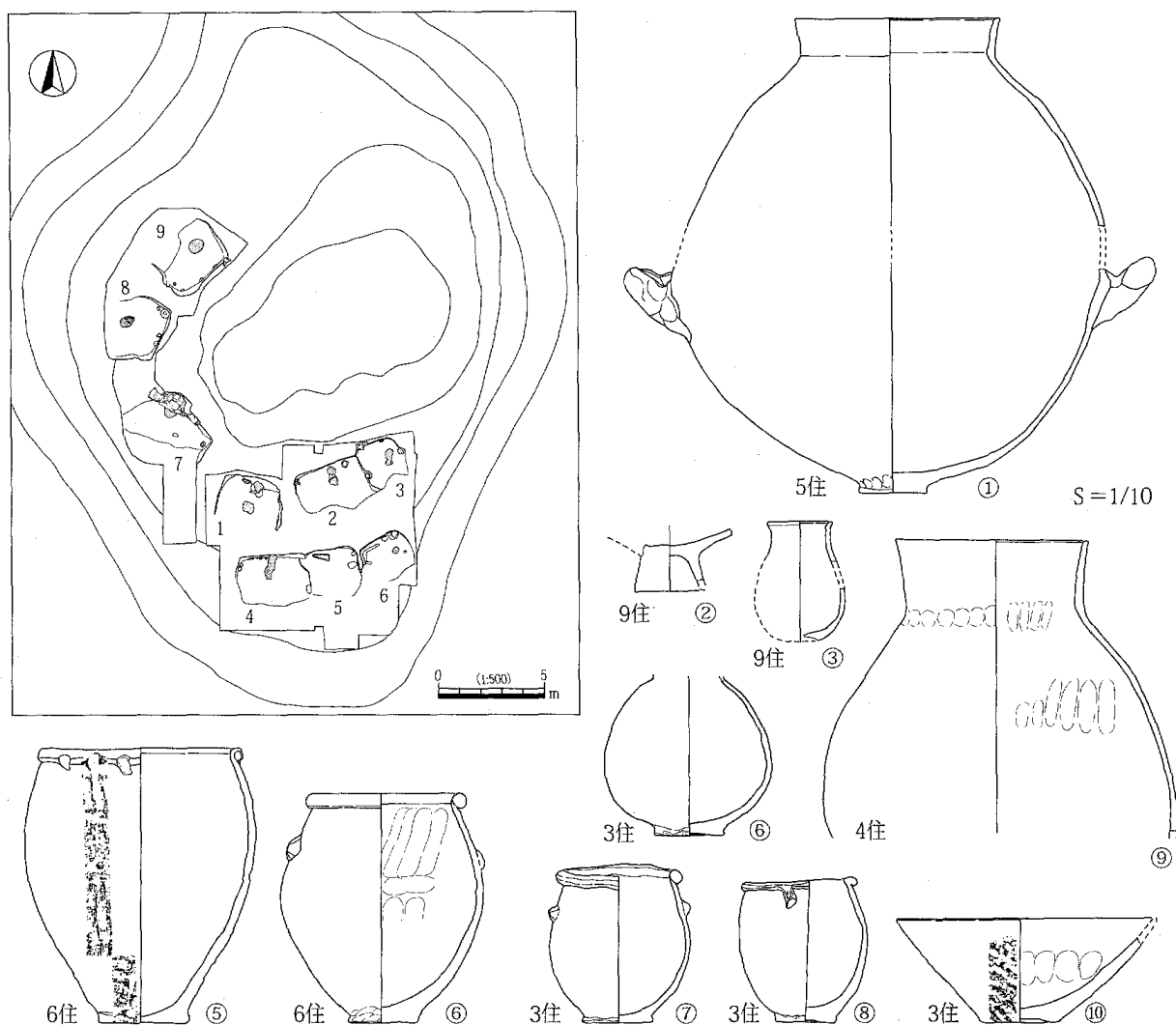
第1図 遺跡の位置

山頂付近に位置し、発見された九軒の住居址が山頂を取り巻くように分布する（第2図）。

九軒の住居址は残存部分によればすべて平面方形である。規模の差は顕著でなく奥壁の長さは平均して三〇〇cm程度である。いずれも炉を備え二つの炉を持つものもある。壁に接する炉（壁付き炉）が1号と7号で確認された。他の施設には壁溝・土坑・小孔などがあるが組合せは様々で定型化していない。石器未製品の出土が目立ち、とりわけ5号住居址では一箇所に集中して出土した。

住居は2・3号、4・6号、8・9号がそれぞれ近接して小群をなす。1号と7号は軸方向や位置がややずれる。小群内には重複関係があり、2号は3号を破壊する。連接と報告された4号と5号も本来は重複したはずだが先後関係は明らかでない。

土器には把手付外反口縁土器、円形粘土帯甕、鉢、高坏脚部などがある。円形粘土帯甕には大・中・小の別があり、胴部最大径の位置がそれぞれ上位・中位・下位にある（第2図⑤⑥⑦⑧）。6号住居址の一点（第2図⑤）は器面に打捺痕があり、同様の痕跡は3号出土の鉢（第2図⑩）にも認められる。貯蔵容器とみられる大型の土器には環状把手が付く外反口縁土器（第2図①）と頸部が緩く外反する長頸壺（第2図⑨）がある。高坏脚部片は空芯短脚である



第2図 保寧校成里遺跡

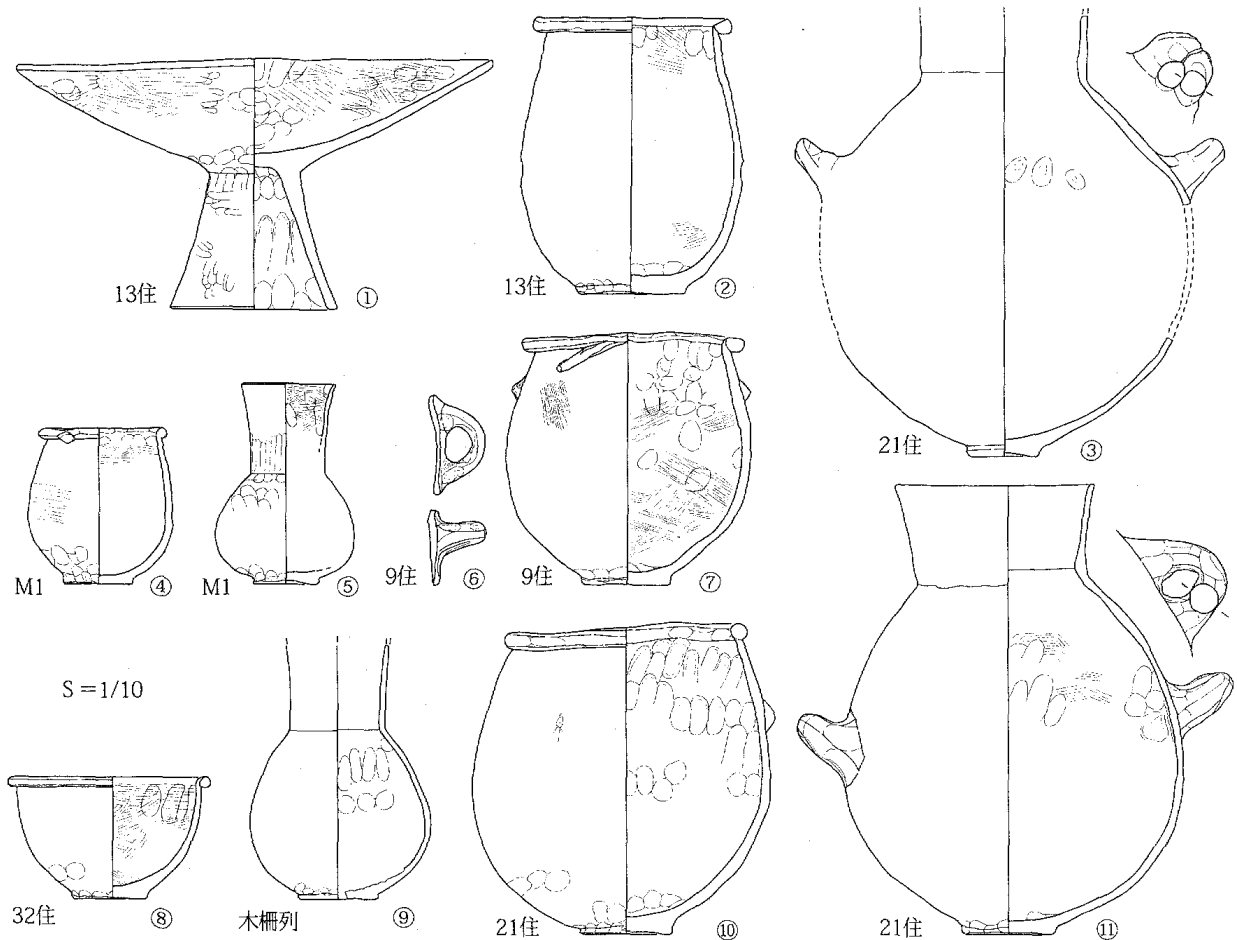
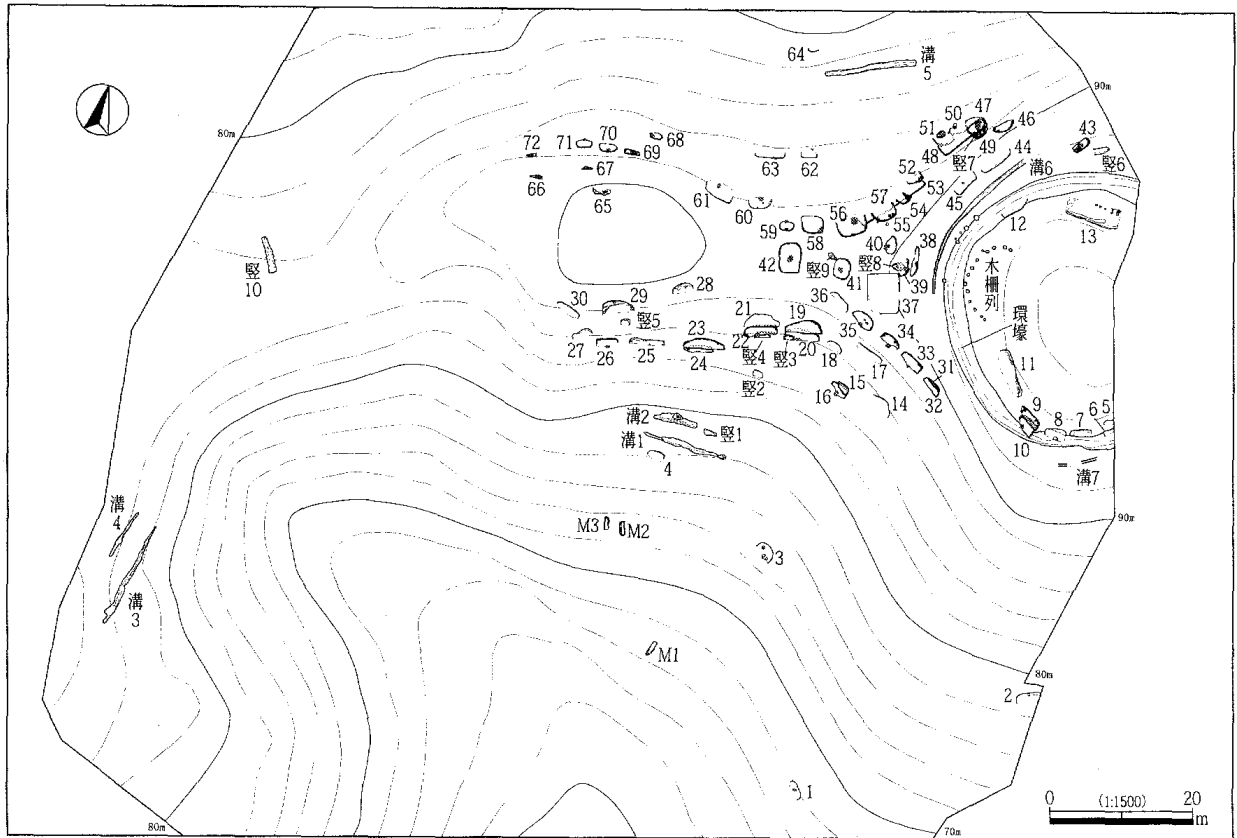
(第2図②)。また長頸壺(第2図⑥)と小壺(第2図③)には丹塗磨研されたものがある。

住居間には重複関係があるが遺物では時期を区分できない。丹塗磨研土器や打捺痕は先行する文化との関係を示し、無文土器文化における位置を探る手がかりとなる。壁付き炉は粘土帯土器文化からの新出要素であるが、1号・7号住居址だけが後出するとは考えにくい。現行の分類基準では一時間幅内におさまる小規模集落という他ないだろう。

(二) 安城盤諸里遺跡

(中原文化財研究院 二〇〇七)

盤諸里遺跡は京畿道安城市孔道邑盤諸里に所在する。韓国道路公社による高速道路建設の事前調査として二〇〇四～〇五年に中原文化財研究院による発掘調査がおこなわれた。遺跡は標高九九mの二つの峰の鞍部に位置する。粘土帯土器文化の遺構には住居址七二軒、環壕、木柵列、溝状遺構七条、土坑墓三基、竪穴遺構一〇基があり、他に旧石器時代遺物、青銅器時代住居址、新羅時代石室墳、朝鮮時代土坑墓などが発見された(第3図)。



第3圖 安城盤諸里遺跡

大部分の遺構は丘陵上平坦部の縁辺に分布し、居住空間の北・西・南側を溝5号、竪穴10号、溝1・2号が区画する。区画の外側にも、南斜面に1号、4号住居址・土坑墓三基、北斜面に64号住居址がある。居住空間内では環壕と溝6・7号が峰部分を環状に区画する。溝3・4号は西峰周囲にある居住域の境界であろうか。

七二軒の住居址はいくつかの小群に区分できる。住居址は、残存部分によれば大部分が平面隅丸(長)方形で、楕円形が少数含まれる。奥壁の長さは平均約三四〇cmであるが大小の差(一四〇〜七六〇cm)が大きい。全容が分かる四二号住居址は四三〇×三二〇cmで短軸が平均値に近い。七二軒のうち三八軒が炉を持つ。炉には地床炉(二五軒)と壁付き炉(一三軒)の二種類がある⁽³⁾。他の施設には壁溝や柱穴などがあるが定型化していない。

遺構間には多数の重複関係があり時間幅をもつ遺跡であると分かる。峰では環壕(先)↓住居址群の重複関係がある。環壕と溝6・溝7・木柵列の関係は不明瞭である。環壕の内側にあり、環壕と重複しない11号・13号住居址は環壕と併存した可能性がある。その場合、環状の区画内に大型住居が存在することとなり集落構成の上で重要な意味をもつが、出土遺物によっても最終的な判断はくだせない。5号、10号・12号住居址は環壕を破壊しており、環壕↓10

号↓9号は連続して重複する。

南斜面中ほどでは4号竪穴↓22号↓21号の関係があり21号が最も新しい。北斜面では47号、51号、52号、57号が複雑に重複する。前者では49号↓7号竪穴・48号、51号↓50号↓48号↓47号の関係がある。9号・51号が古く47号が最も新しい。住居の規模は小↓大(48号)↓小と変遷する。また、先行する49号は壁付き炉を備える。後者の重複関係は、57号↓53号・54号・55号・56号、54号↓53号↓52号である。こちらは、まず大型住居址(57号)があり廃絶後には小型住居址がつづく。小型住居址間の重複では壁付き炉の位置が奥壁中央(54号)から奥壁隅(52号)に変化している。

住居の配置は、等高線に沿った列状の配置と、同一箇所における垂直方向の重複が特徴的である。列状配置には重複関係があり見かけ上の列である可能性がある。垂直方向に重複する住居址では上部側が新しい場合が多い。どちらの場合も一定範囲内で廃絶と新築が継続しており、居住域の定まった小群の存在が想定できる。すると盤諸里遺跡には「5号、13号」「14号、22号、竪穴2、3号」「23号、30号・竪穴5号」「31、36号」「38、42号、竪穴8・9号」「44号・45号」「46号、51号」「52号、63号」「65号、72号」という小群が認められる。このうち65号、72号の小群は他

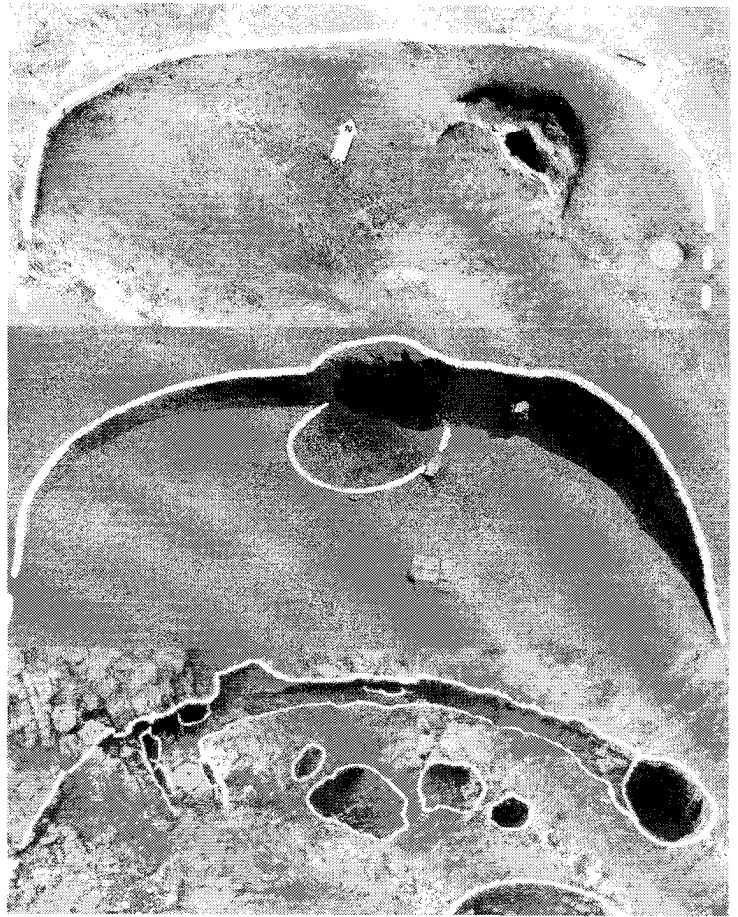


写真1 火処の諸例

(上：高城松峴里B1号住居址、中：安城盤諸里70号住居址、
下：泗川芳芝里10号住居址)

と在り方が異なる。これら住居址は小規模で、71号を除くすべてが壁付き炉を備える。また壁付き炉は床面と壁を浅く掘り窪めるなどやや構造化している(写真1中)。

土器には把手付長頸壺、円形粘土帶甕、高坏、黒色磨研長頸壺、黒色磨研粘土帶碗がある。粘土帶甕は、環壕との併存を想定しうる13号住居址(第3図②)から、より新しい9号住居址(第3図⑦)および21号住居址(第3図⑩)まで、最大径が下位にある丸みを帯びた器形が共通する。

13号住居址には空芯短脚の高坏(第3図①)、9号住居址

には環状把手破片(第3図⑥)、21号住居址には環状把手付長頸壺(第3図③⑪)がそれぞれ伴う。いずれも現状把握されている編年では古段階に属し、遺構間の時期差を捉える指標とならない。他の遺構も状況は同じである。黒色磨研長頸壺(第3図⑨)が木柵列から出土した点、副葬土器(第3図④⑤)が相対的に小型である点は土器の役割を示すものとして留意したい。

重複関係によれば、盤諸里集落は環壕とともに造営が始まったと考えられる。環壕・木柵列・大型住居址のある峰部は集落内の特別な空間であったが、やがて環壕は廃絶され峰部は列状配置の小型住居址に占有される。他の小群には37号、48号、57号など

の大型住居址があり、重複関係の段階を比べると、少しずつ時期を違えて存在したともいえる。可能性としては11号・13号↓57号↓48号↓37号だが、証明は難しい。大型住居址が小群の紐帯を維持する象徴的な役割を担ったとして、それが小刻みに移動したことは小群間の関係に関わり、また別の問題につながる。65号↖72号という特徴的な一群についても、壁付き炉を新出要素とし時期差に還元するか、小群間の役割や系譜の別に還元するか、位置づけの判断に決め手がなく、他箇所の重複関係で先行する49号住居址が壁

付き炉を備えることもあり、盤諸里遺跡だけでは解決が困難である。

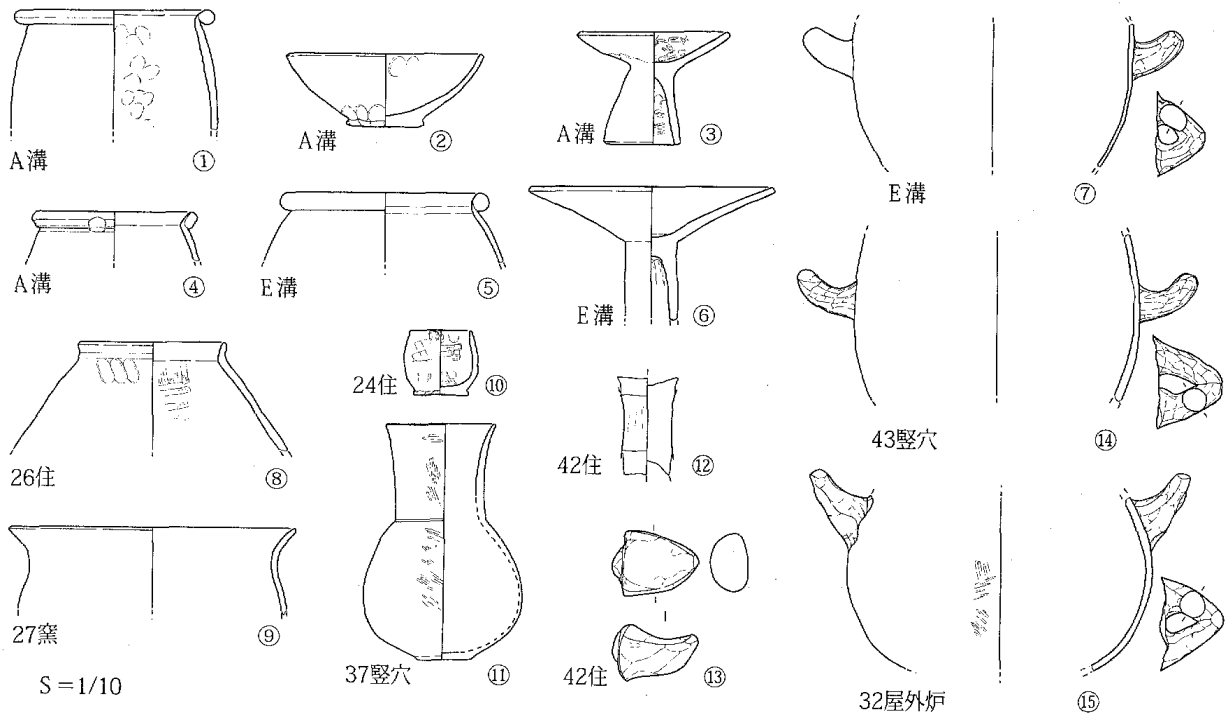
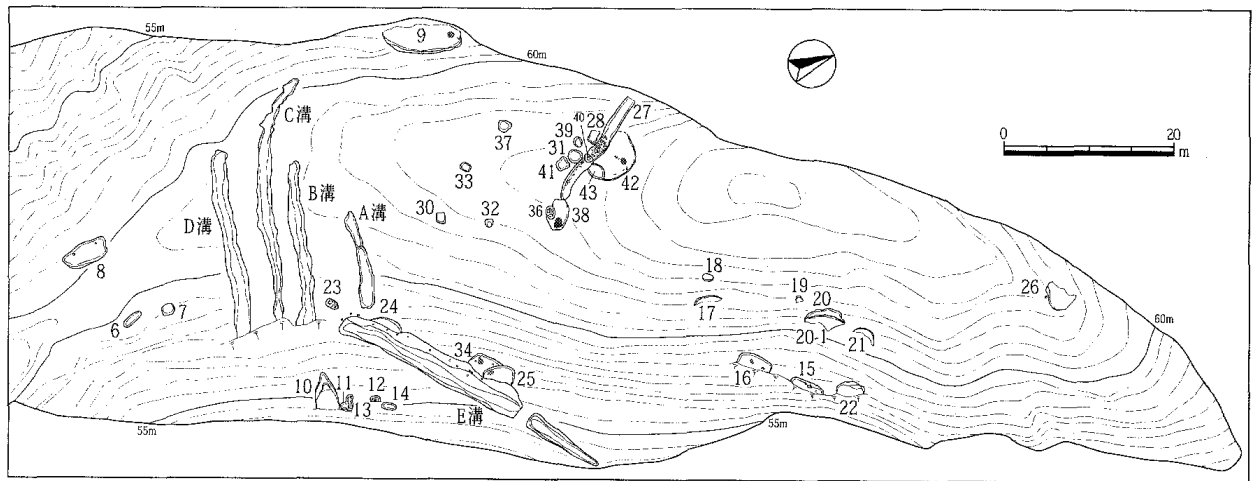
(三) 陝川盈倉里遺跡

(慶南考古学研究所二〇〇二)

盈倉里遺跡は慶尚南道陝川郡陝川邑盈倉里山二九番地に所在する。国道迂回路建設の事前調査として一九九九年に慶南考古学研究所による発掘調査がおこなわれた。遺跡は黄江の北流に沿った南北に細長い標高六五mの丘陵上に位置する。粘土帯土器文化の遺構には住居址一三軒、溝七条、窯三基、竪穴一二基、墓七基があり、他に統一新羅時代の火葬墓と朝鮮時代の住居址が発見された(第4図)。

丘陵は北・西・東の三方が急傾斜で、集落へのアプローチとなる南側には溝が集中し居住域の内外を区画する。溝の南・東側には孤立して分布する住居や墓群があり、溝の北側には二箇所の遺構集中部がある。峰の東斜面には住居址を中心とする小群があり、峰の南

粘土帯土器文化の地域的様相について



第4図 陝川盈倉里遺跡

平坦部には竪穴を中心とする小群がある。東小群のうち、斜面下方には住居・溝・竪穴があり22号竪穴では細形銅剣が底面に突き刺さった状態で出土した。斜面上方には住居と竪穴があり20号住居址では同一箇所における上下の重複関係が認められた。総じて居住区域であったといえる。

南小群では、42号住居↓43号屋外炉↓27号窯↓40号竪穴、38号住居↓36号石棺墓の重複関係がある。前者では住居↓屋外炉↓窯と場の用途が変遷し、後者では住居↓墓と変化した。南小群では他に細形銅剣・銅鏃を革に包んで埋納した竪穴(28号)、屋外炉(32号)、黒陶長頸壺がおさめられた竪穴(37号)など様々な活動の痕跡がみられる。総じて居住空間から機能空間へ変化したといえる。

溝の集中箇所ではE溝が他の遺構と重複する。24号住居↓E溝、34号住居↓25号住居↓E溝の関係であり、居住空間として利用された後に境界施設が設置された。E溝下方の墓群(11号、14号)の造営がE溝を契機とするなら両者は同段階となる。溝同士の時期差ははっきりしないが、A溝とE溝では後述のようにE溝の遺物がより新しい。

土器には円形粘土帶甕、高坏、黒色磨研長頸壺、鉢、碗、把手付壺がある。壺には口縁が短く外反するもの(第4図⑧)とゆるく外反するもの(第4図⑨)がある。高坏をみると、A溝床面出土の短脚高坏(第4図③)とE溝床面出

土の空芯長脚高坏(第4図⑥)では後者の方が新しくA溝とE溝を時期差と判断できる。⁴⁾より新しい中実長脚の高坏(第4図⑫)は42号住居址から出土した。42号住居址は一連の重複関係でもっとも先行するが、遺物は覆土から出土した。器形が分かる把手付壺はいずれも三角把手である(第4図⑦⑭⑮)。E溝と43号竪穴はほぼ同型であるが、32号屋外炉は先端が尖る三角把手と頸部が締まる器形が他の二つと異なる。南小群における42号↓43号↓27号および周辺竪穴群という関係に照らすとE溝はおおよそ43号竪穴に併行するといえる。よって27号窯と周辺の竪穴群が遺跡内のもっとも新しい遺構群となろう。

盈倉里集落は、まずA溝(、D溝)で区画された北側に南小群、東南小群(E溝箇所)の二つの居住区域をもって造営がはじまる。東小群では居住区化以前のこの段階に青銅器埋納をおこなったと考えられる。つづく段階には、南小群は居住区から機能空間に変わり、東南小群も居住区からE溝による境界施設へと変わる。これを契機にE溝東南側の墓域形成がはじまる。南小群・東南小群が居住空間でなくなったこの段階から、おそらく東小群が居住域となった。最後の段階には、南小群は窯や屋外炉が集合する機能空間となる。このときの居住区は東小群にあるが、溝の埋没がはじまった状況を勘案すると散居する個別の住居(8・

9号)もこの段階に属し、住居が機能空間(南小群)を取り巻く配置となる。このとき機能空間(南小群)では盈倉里集落二度目の青銅器埋納がおこなわれた(宮里二〇〇九a)。

(四) 泗川芳芝里遺跡

(慶南発展研究院 歴史文化센터 二〇〇五・〇七)

芳芝里遺跡は慶尚南道泗川市泗南面芳芝里五五六番地に所在する。慶尚南道開発公社による西部慶南尖端地方産業団地内所在の遺跡として二〇〇二〜〇三年に慶南発展研究院歴史文化センターおよび慶尚大学校による発掘調査がおこなわれた。遺跡は泗川湾に面した独立丘陵上に位置する。丘陵はおおよそ南北四〇〇m、東西一五〇mの規模で、泗川湾に面する西半部は浸食され絶壁となっている。粘土帯土器文化の遺構には住居址二軒、墓三基、竪穴七一基、溝二八条、貝塚四箇所、遺物包含層二箇所があり、他に原三国時代の窯・竪穴、高麗時代・朝鮮時代の建物址や竪穴、堤防などが発見された(第5図)。

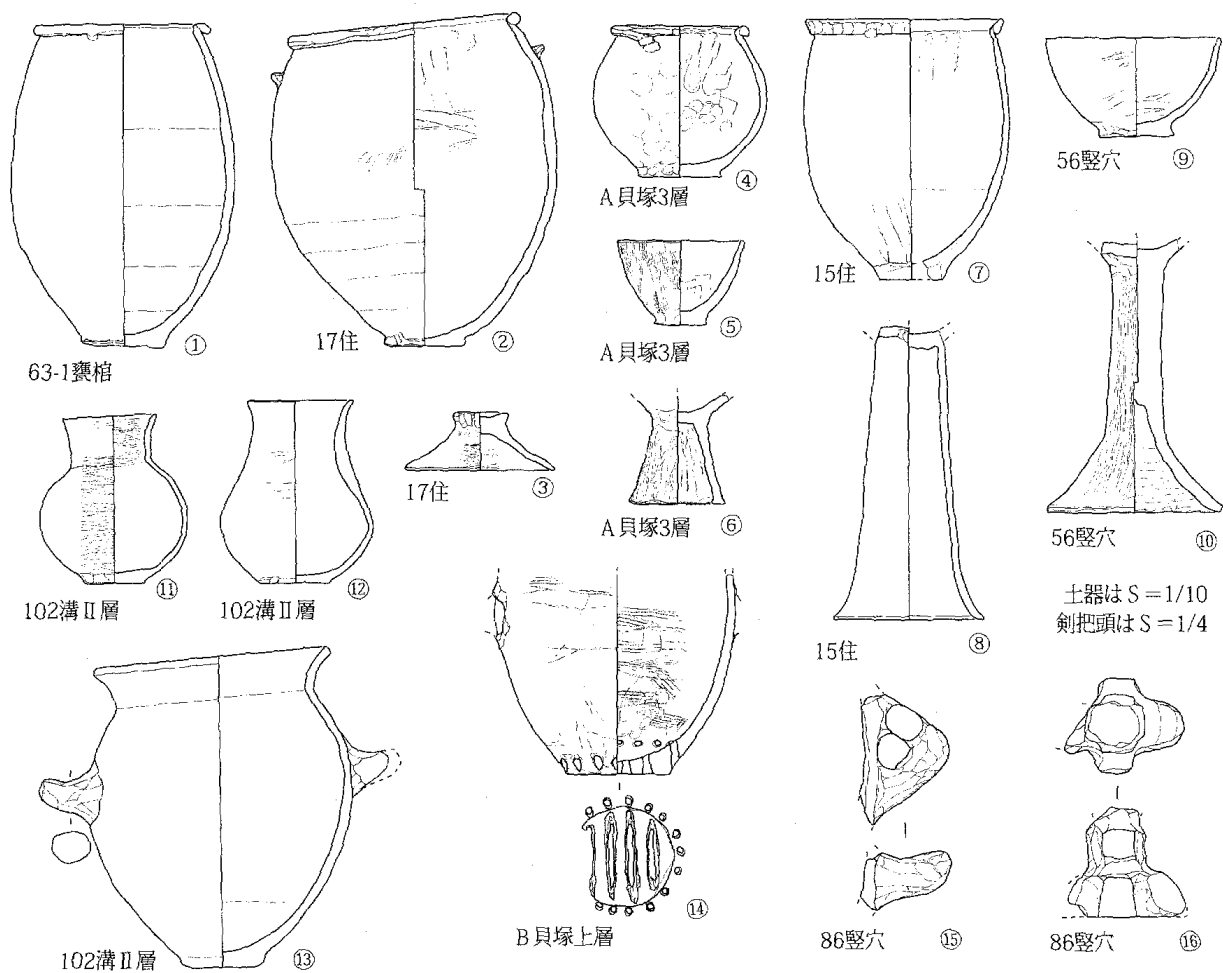
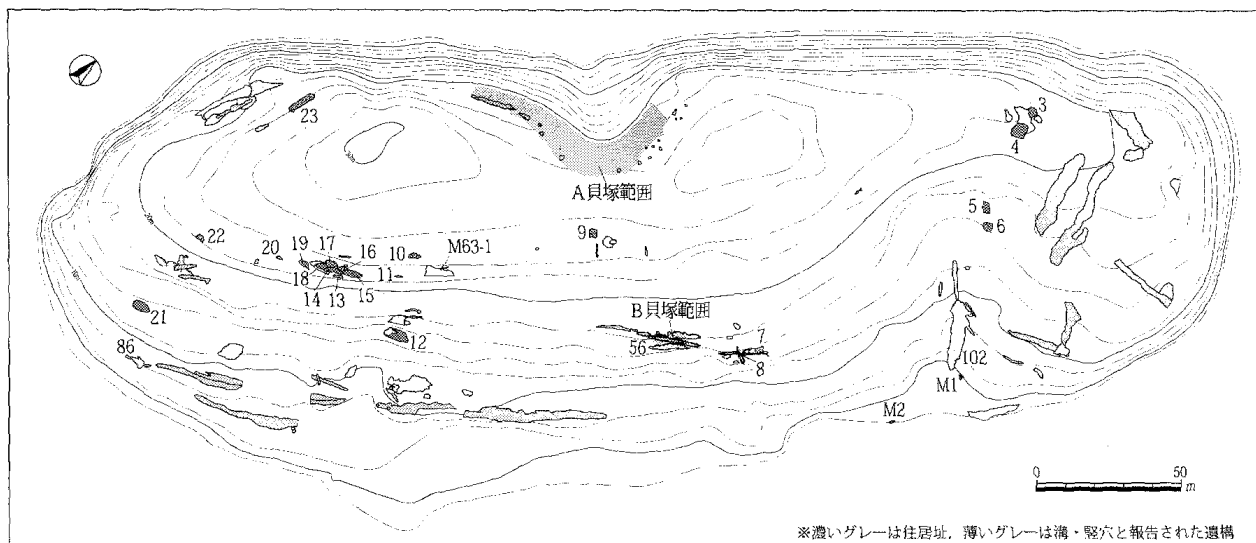
住居址は二軒と面積の割に少ない。規模は長軸の平均が約四五〇cmで大小の差(二〜一〇m)が大きい。大型の二軒(12号・23号)は孤立して分布し、中規模の住居は密集して分布する。炉が確認されたのは三軒で、それとは別に板石で構築された炕(煙道)および竈をもつ住居址が三

軒確認された。

住居址は一軒二軒ずつ散在するが南寄りでは七基が集中分布する。集中部には重複関係があり、16号↓15号↓14号、16号↓17号↓18号↓14号となる。継続して利用された居住区域であり、二軒三軒ずつが併存したであろう。炕をもつ住居址には東斜面の二軒(7・8号)と住居密集区近くの一軒(10号)がある。前者は併存せず、全体に集中傾向はみられない。

竪穴は性格不詳のものが多く、丘陵頂部A貝塚付近に集中する小竪穴群は規模が揃い分布も排他的である。また101号溝には焼成遺構、102号溝には排水溝↓廃棄場の機能が推測された。溝と一部の竪穴は居住域の縁辺を区画する。東縁辺の南半は117号・118号・119号溝に区画される。118号溝は119号溝を破壊し時期差があるが、117号溝と二者は相互補完的に機能したようにみえる。

土器には粘土帯甕、蓋、把手付壺、高坏、碗、小壺、甑などがあり、「類似弥生土器」も報告された。円形粘土帯と三角形粘土帯は遺構において混在するがA貝塚の層序では三角形粘土帯土器が遅れて出現することが確認された。甑や棒状把手も同様に後出する。中実長脚の高坏(第5図⑩)は三角形粘土帯土器に先立って出現したとみられる。高坏は空芯長脚(第5図⑧)が主体となるが、わずかに認



第5図 泗川芳芝里遺跡

められた空芯短脚（第5図⑥）はA貝塚において最下層から出土した。住居密集区域における重複関係で中段階にあたる17号からは円形粘土帶甕が出土したが（第5図②）、15号からは三角形粘土帶土器や類似弥生土器、空芯長脚高坏が出土した（第5図⑦⑧）。もっとも新しい14号の出土遺物は破片ばかりであるが口縁がくの字に折れる土器が含まれていた。炕を備える三基の住居址（7号・8号・10号）には帰属時期の手がかりとなる遺物がない。不確定な部分が多いが、円形粘土帶甕、三角把手壺、空芯長脚高坏を主体とするセットのなかにまず中実長脚高坏が加わり、おくられて三角形粘土帶、棒状把手壺、甗が加わったようである。諸要素が混在しながら緩やかに移行したといえる。東縁辺南半の溝三条は、119号溝に遺物が少ないものの、117号溝と118号溝はともに円形粘土帶甕・三角把手・空芯長脚高坏が中心であり、三角形粘土帶出現に先立つ遺構とみられる。86号竪穴から出土した剣把頭（第5図⑬）は筆者のC立柱形Ⅱ式（宮里二〇〇九b）にあたり同遺構からは三角把手片（第5図⑮）も出土した。86号竪穴は117号・119号溝と並んでおり同時に機能した可能性が高い。

芳芝里集落は大きく三角形粘土帶土器出現以前と以後に分かれる。居住は常に散居的である。三角形粘土帶土器・棒状把手壺・甗・炕・板状鉄斧など、新出の要素が現れる

粘土帶土器文化の地域的様相について

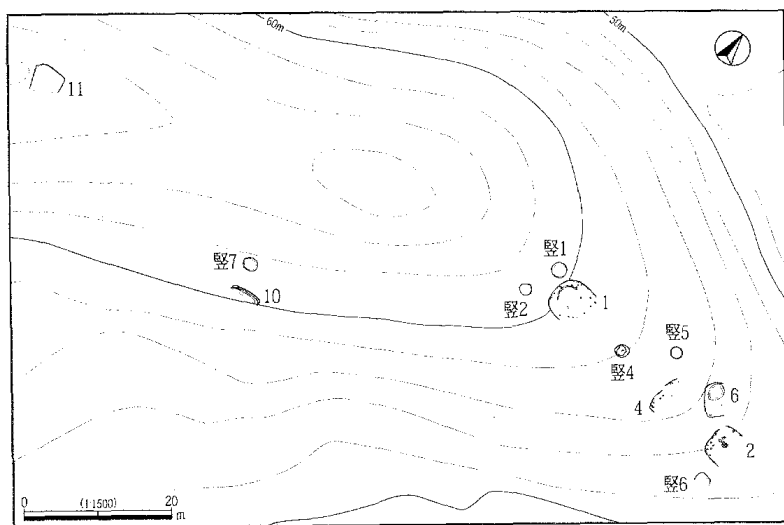
頃には南半の区画溝は埋没する。北側では区画溝が機能したようであるが、集落内における居住域の移動はみられない。貝塚は継続して形成され生活用具の組成も大きくは変わらない。新来の文化は緩やかに受容されたといえる。

（五）江陵芳洞里遺跡（江原文化財研究所二〇〇七）

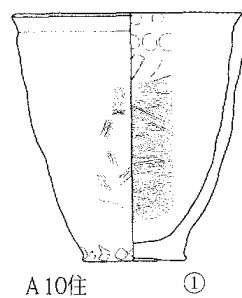
芳洞里遺跡は江原道江陵市沙川面芳洞里山九〇番地に所在する。科学一般地方産業団地建設の事前調査として二〇〇四年に江原文化財研究所による発掘調査がおこなわれた。付近一帯は東海をのぞむ丘陵地帯で、建設予定地内の樹枝状にのびる丘陵のうち三箇所が発掘調査の対象となり、北から順にA区・B区・C区が設定された。ここでは粘土帶土器が出土したB区、C区を取りあげる。

B区は北東方向にのびる丘陵で、住居址六軒と竪穴一〇基が発見された（第6図）。遺物が出土した竪穴は二基に過ぎず、残りの八基は位置と形状の類似が時期判定の根拠となった。

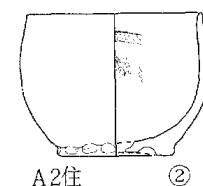
六軒の住居址には規模の違いがあり、大（一五m）と中（五・六m）・小（三m）に分かれる。丘陵の頂部には「共同建物」と報告された大型住居があり、周囲に中小の住居址四基と竪穴四基が分布する。他には竪穴二基よりなる群と、住居と竪穴四基からなるまとまりがある。これら3つの小群が一定の間隔を置いて丘陵の平坦部分に分布する。



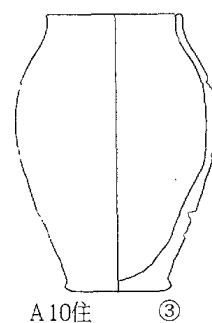
A区



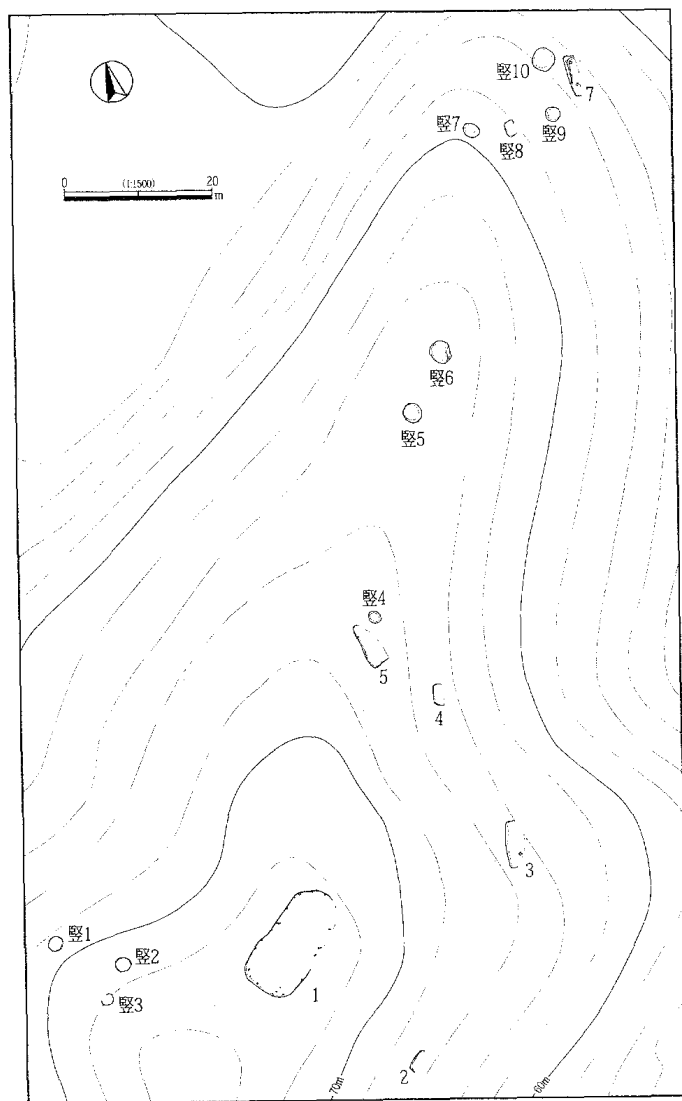
A10住



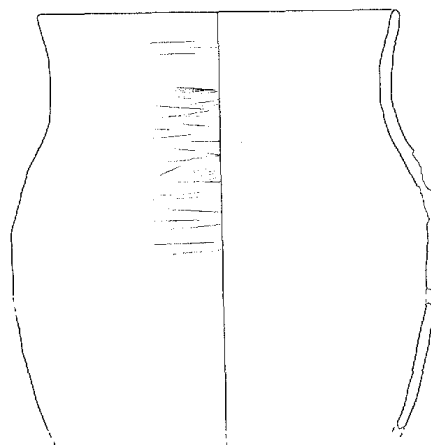
A2住



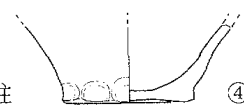
A10住



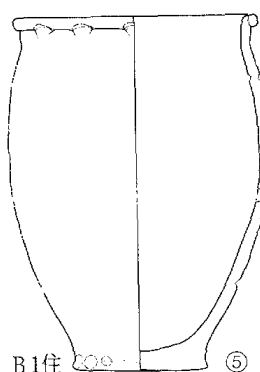
B区



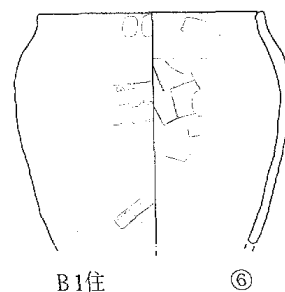
A2住



B1住



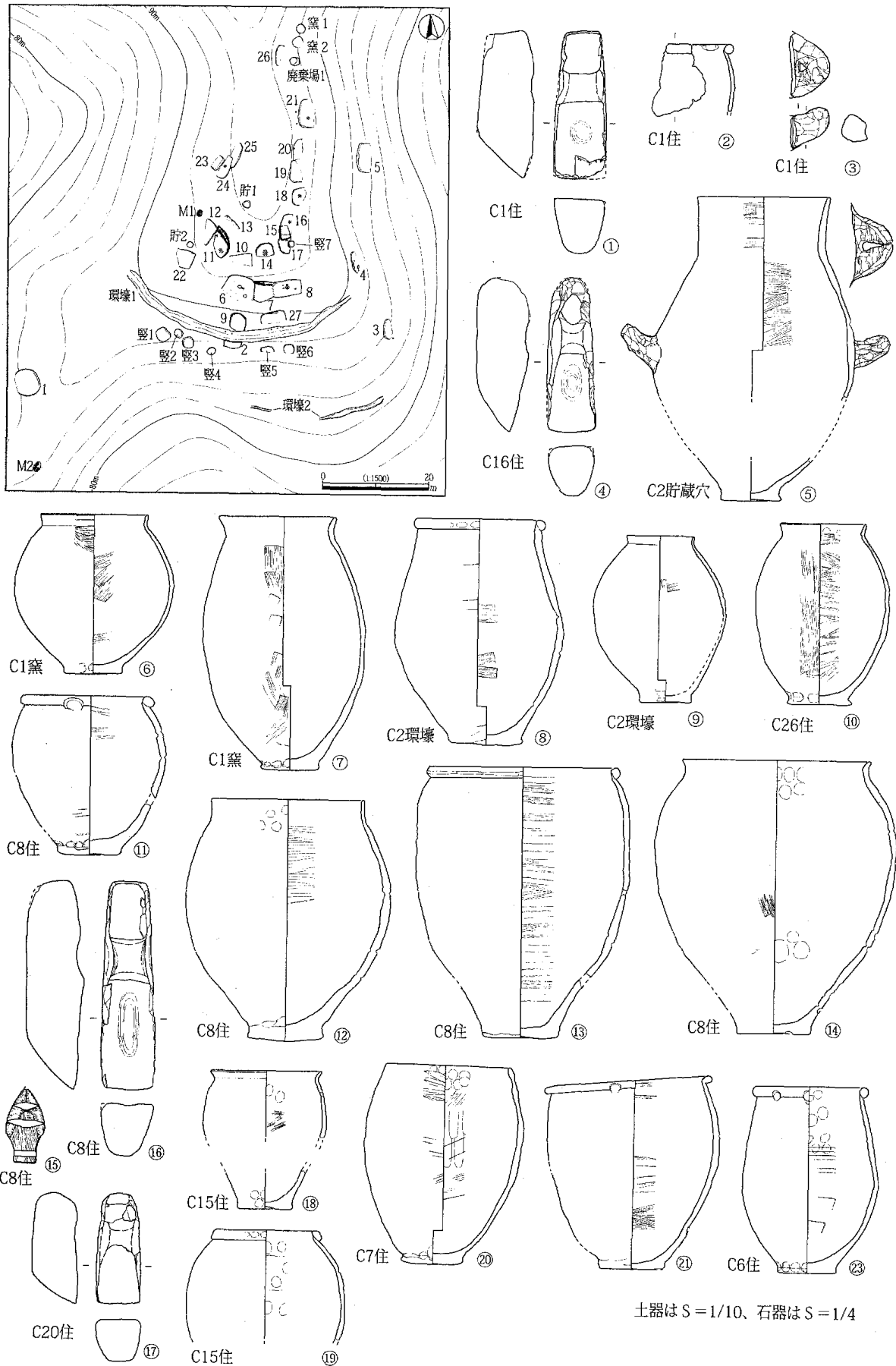
B1住



⑥

S=1/10

第6図 江陵芳洞里遺跡 A・B区



第7図 江陵芳洞里遺跡C区

土器には粘土帶土器、外反口縁土器があり後者にはサイズの違いがある。把手付壺や高坏はみられない。B1号住居址からまとまった数の土器が出土したが、多数の外反口縁土器のなかに粘土帶甕が混じる状況であった(第6図⑤⑥)。他の遺構も状況は同じである。

C区は付近一帯でもっとも標高が高く、標高九六mの峰から南にのびた丘陵上に住居址二七軒、竪穴七基、窯一基、廃棄場一基、貯蔵穴二基、環壕二条、墓二基が分布する(第7図)。B区よりも狭い範囲のなかに遺構が密集しており重複関係も多い。住居址は長軸の平均が約四mで変異は小さい。炉を備える住居址は一〇軒あるが壁付き炉はない。段施設や貼床、壁溝など諸施設があるが定型化していない。住居址は全体に丘陵平坦部を取り巻くように分布する。竪穴や窯・廃棄場といった施設が一箇所に密集する。住居址は等高線に沿って列状に分布し重複関係がみられる。8号↓7号↓6号の重複は報告書の三期区分に対応する。17号↓16号↓15号、25号↓24号および23号は水平方向の重複に上下の重複が加わる。近接して分布する11号・12号、19号・20号も併存しないだろう。するとC区の併存住居数は少なく見積られる。また2号・9号は環壕1に破壊されており、環壕設置以前から集落の造営が始まったと分かる。環壕1に沿うように分布する竪穴1〜6は環壕1と同時期である

う。

土器には外反口縁土器、円形粘土帶甕、把手付壺、高坏脚部片がある。圧倒的多数を占めるのは大小の外反口縁土器で、器形にやや変異がある。粘土帶甕、把手付壺、把手片などは比率として少ない。把手付きで器形が確認できる土器はC2貯蔵穴出土品(第7図⑤)で、遺跡内ではめずらしい直立口縁ないし長頸壺である。把手は組合せ技法が明瞭に残る環状把手である。他に有溝石斧、石鏃、漁網錘などがあり、とりわけ漁網錘は数が多い。有溝石斧には変異があり、裴真晟(二〇〇一)の編年によればC1住(第7図①)↓C16住(第7図④)↓C8住(第7図⑩)↓C20住(第7図⑰)と配列できる。C8住↓C7住↓C6住の土器をくらべると、C8住は最大径が中位〜上位にあり口縁が短く外反する器形が特徴で、粘土帶土器の器形もほぼ同様である(第7図⑪〜⑭)。C7住には内湾口縁土器があり粘土帶土器も同様の器形である(第7図⑳㉑)。C6住は資料が少ないが粘土帶土器の割合が増加し、器形は最大径が下位に下がっている(第7図㉓)。窯・竪穴・貯蔵穴・環壕から出土した土器は大部分口縁が短く外反する器形であり、時期の特定は難しい。

遺構の分布や重複関係に有溝石斧の編年などを加えて集落の変遷をみると、まず1号・2号・9号に孤立分布する

3、5号などが加わる散居的な構成から始まり、つづく段階には環壕の掘削とともに堅穴が設置される。8号↓7号↓6号および17号↓16号↓15号は環壕と併存したはずだが期間の特定は困難である。貯蔵穴や墓の位置は不規則であるが、環壕2もふくめて境界施設、居住区、窯など機能空間の構成は安定している。環壕掘削後は集落構成に大きな変化がなかったといえよう。

(六) 小結

以上の地域を異にする五つの集落遺跡には時期差を含みつつ共通点と差異点がみられる。遺跡間の時間的關係、遺構の分布様相、新出要素の現れ方について整理する。

遺跡間の時期的關係について、粘土帶土器文化の編年として通用している把手形状、高坏脚部形態をみると、保寧校成里、安城盤諸里、江陵芳洞里は相對的に古く、陝川盈倉里はそれら三者との接点を持ちつつより新しい要素を含む。泗川芳芝里は盈倉里と接点を持ちつつさらに新しい要素を含む。地域を問わなければ、円形粘土帶土器の早い段階から三角形粘土帶土器の出現に至る過程をたどることができる。

遺構の分布様相を見ると、複数遺跡にみられる共通項として区画施設の存在、等高線に沿った住居の列状配置とそれにともなう小群の形成があらる。住居の配置では保寧校

成里、安城盤諸里、江陵芳洞里C区、陝川盈倉里がよく似た特徴を示し、盤諸里の峰を囲む環壕は特異であるが、溝が区画する位置にも共通性がある。丘陵平坦面に遺構が集中する江陵芳洞里B区の在り方は後述のように先行する時期の特徴である。泗川芳芝里の構成は、時期差や集落間關係における位置など様々な要因を考慮すべきであるが、やはり他と異なる特徴をもつ。

新出要素の現れ方として炉の状況をみておく。壁側に著しく偏った炉は粘土帶土器文化の特徴とされるが、詳しくみると炉には壁に寄ったもの（偏在型）と壁に接したもの（壁付き炉）の二種類がある。このうち偏在型は松峴里B1号住居址（写真1上）のように粘土の上部構造があった可能性がある。偏在型を他の地床炉と区別するのはやや困難をとまなうが、傾向としてみると陝川盈倉里には高頻度で、安城盤諸里には間々あり、残りの遺跡にはみられない。一方で壁付き炉は保寧校成里と安城盤諸里でのみ確認された。芳洞里遺跡にはどちらもなく、芳芝里遺跡では竈・炕が確認された。地域ごとに現れ方が異なっている。

土器には高坏に共通した様相がみられるが、粘土帶が付加される甕や把手が付加される壺の器形は遺跡ごとに異なる。こうした遺跡ごとの違いは、粘土帶土器文化が出現する遺跡の、ひいては地域ごとの脈絡の違いに起因すると考

えられる。次章で地域文化との継承性を検討する。

三 先行する文化との関係

本稿でとりあげた五つの遺跡を地域の脈絡において捉え直す。地域単位は網羅的な整理をおこなった庄田慎矢（二〇〇九）の区分にしたがう。

（一）泰安半島地域（保寧校成里遺跡）

泰安半島地域は忠清道の西海岸地域にあたり、先行する遺跡には大規模集落である保寧寛倉里遺跡がある。安在皓（二〇〇四）は打捺文が特徴的な地域としており、打捺文土器は錦江流域の北々西側を取り囲むように分布するが、この地域の特徴が校成里の土器にも現れている。校成里6号住居址の粘土帶甕（第2図⑤）と3号住居址の鉢（第2図⑩）の器面には打捺痕があり、在地の土器の特徴をしめす。その他の粘土帶甕の器形には変異があるが、寛倉里遺跡に類品を求めることができる。粘土帯と乳突起は新出要素であるが、やはり既存の土器が母胎となる。5号住居址出土の環状把手付壺は器形が松菊里式土器に近い。有溝石斧をはじめとする石器も在地の松菊里文化を継承している。総じて、校成里の遺物組成は在地の土器を土台に円形粘土帯、環状把手、高坏など新来の要素を部分的に付加したも

のといえる。ただし住居址や壁付き炉には生活上の大きな変化が認められる。

（二）牙山湾地域（安城盤諸里遺跡）

牙山湾周辺地域は錦江流域と漢江流域の中間に位置し、松菊里文化分布範囲の北縁一帯にあたる（金承玉二〇〇六）。円形松菊里型住居や三角形石刀などが定着しない地域である。庄田（二〇〇九）は松菊里文化の最も新しい段階にあたる遺跡は現時点で不在とした。盤諸里遺跡の青銅器時代7号住居址は多数の貯蔵穴をもち内湾口縁土器が出土したが、現時点で粘土帯土器文化にもっとも近い段階といえる。断絶ともいえる状況は漢江下流域にも通ずる。漢江下流域では坡州堂下里遺跡や富川古康洞遺跡が無文土器中期併行の遺跡としてあがるが（宋満榮二〇〇二、庄田二〇〇九）、それら遺跡の土器は、盤諸里遺跡の、下位に最大径があり全体に丸みを帯びた粘土帶甕の器形（第3図②⑦⑩）とは異なる。把手付壺の、胴下部が丸みをもって張り長い頸がやや外開きにのびる器形（第3図⑪）は、前代の褐色磨研壺や直立口縁壺とも似るが連続するとはいえない。むしろ新出要素である黒色磨研長頸壺（第3図⑤⑨）に通じる器形である。盤諸里遺跡の土器には地域文化の継承を確認できない。一方で炉のない小型住居と地床炉をもつ小型住居はこの地域の集落変遷の延長線上に位置づける

ことが可能で（宮里二〇〇五）、在地系の住居に少数の偏在型炉と壁付き炉が部分的に混じた様相ともいえる。この状況をどのように説明できるかはもう一度関連資料を整理した上で検討したい。

（三）黄江・南江流域（陝川盈倉里遺跡）

黄江・南江流域は嶺南地方の内陸部に位置し松菊里文化の分布圏内に入る（金承玉二〇〇六）。居昌大也里遺跡などが地域間での継承関係をさぐるための遺跡となる。盈倉里遺跡の土器は器形全体が窺える資料が少なく比較が困難である。粘土帯甕の器形は中位以下に最大径を持つといえるが、大也里遺跡の松菊里式土器は多様で類品が容易に見つかる。盈倉里遺跡でわずかに確認された外反口縁土器には、大也里遺跡との類似が窺えるもの（第4図⑧）とあまり類例のない緩く大きく開く器形（第4図⑨）がある。後者はより新しい遺構から出土しており変化形ともいえる。把手付壺の器形が基本的にこれら外反口縁土器であるなら、粘土帯と把手の現れ方は校成里遺跡と同様、先行する地域文化を継承したものといえる。さらに盈倉里26号住居址では覆土から三角形石刀が出土し松菊里文化との接点を窺わせる。盈倉里遺跡はいくらか時間幅をもつ遺跡であるが、その間に把手付壺は頸のすばまる器形（第4図⑮）へと変化した、把手には組合せでない角形把手（第4図⑬）も現れ

た。松菊里文化を土台に新来要素が出現した後、粘土帯土器文化としての編成が進んだ様子が窺える。

（四）東南海岸地域（泗川芳芝里遺跡）

南海岸の東部で洛東江下流域にあたる。松菊里文化の分布圏内で、近くには松菊里文化期の大集落である泗川梨琴洞遺跡がある。芳芝里遺跡は粘土帯土器文化のなかでもやや時期がくんだり、むしろ三角形粘土帯土器の出現過程を検討するのに適している。同地域の金海大清遺跡からは、空芯長脚高坏とともに松菊里式土器に似た把手を持たない外反口縁土器が出土しており大型貯蔵用土器は前代の器種を継承した可能性がある。すると、芳芝里の棒状把手付土器（第5図⑬）は独自の変化を遂げた器形といえるだろう。芳芝里遺跡から出土したC立柱形Ⅱ式把頭は細形銅剣成立期（発展1期）にあたり（宮里二〇〇九a）、従来であれば粘土帯土器の出現期と考えられた段階である。出土遺構である86号竪穴の時間的位置次第であるが、遺跡の主体をなす空芯長脚高坏が同時期ならば、粘土帯土器の出現時期には再検討の余地が生じ、後述のように前代にまで遡る可能性が高い。

（五）嶺東海岸地域（江陵芳洞里遺跡）

江陵を中心とした地域で松菊里文化の分布範囲外にある。地理的には漢江上流域や洛東江上流域に近い。この地域の

集落について検討した朴榮九（二〇〇七）は無文土器前期集落と芳洞里C区の中間に芳洞里A区を位置づけた。芳洞里A区（第6図）からは粘土帯土器が出土しないが、丘陵平坦部を中心とする遺構配置がB区や同地域の高城松峴里遺跡のB、D区と似る。芳洞里A10号住居址出土の深鉢（第6図①）は松峴里D7号住居址に類品があり同住居からはS平形i式把頭が出土した。松峴里B、D区は遺構配置パターンと併せて松菊里型住居と報告された住居址が特徴的であり、出土遺物には円形粘土帯土器やごく少数の把手・高坏がある。松峴里遺跡を詳細に検討したのち再論する必要があるが、大まかにいってこの地域では松峴里遺跡＋芳洞里A・B区↓芳洞里C区と推移した。この間、集落は丘陵平坦部における面状配置（松菊里型住居を含む）から丘陵平坦部をかこむ斜面配置へと変わり、土器においては粘土帯土器の割合が増加する。しかし、いずれの場合も土器の主体をなすのは在来の胴上位に最大径をもつ直立口縁および外反口縁の土器である。加えていえば、粘土帯土器はそれらの在来土器に粘土帯装飾を加えたものである。同地域の江陵松林里遺跡はS立柱形iii式把頭の出土によりさらに時期がくだると分かるが、ここでも主体をなすのは外反口縁土器で粘土帯土器の割合は少ない。嶺東海岸地域では集落の構造こそ変化したが、土器の組成は外反口縁土

器が主体であり、一部に粘土帯の装飾を加えるという在り方がつく。把手付土器や高坏は極めて少ない。壁付き炉もみられず粘土帯土器文化の伝わり方、受入れ方が他とは相当に異なる。

四 むすび―粘土帯土器文化の出現をめぐる

諸問題について―

無文土器中期にまで無かった要素が新たに登場し、朝鮮南部のひろい範囲で受容されたのは間違いない。しかし前章までに述べたように、多くは在来文化が基盤となり新来の要素を部分的に採用していた。朴淳發（二〇〇四）の指摘以来、遼北の「涼泉類型」との関係が意識され、集団の移住という理解にもとづいて粘土帯土器文化の出現を考える傾向が強まったが、本稿はそれとは異なる論点を提出した⁽⁵⁾。まだまだ課題は多いが、粘土帯土器文化出現に関わる問題点をいくつか指摘して本稿を締めくくりたい。

起源とされる「涼泉類型」は辛岩（一九九五）が提唱し、鉄嶺市博物館（一九九二）や肖景全・周向永（二〇〇七）によって内容が整理された。鉄嶺・開原・西豊を中心に分布し西豊県姜家溝遺跡などを代表とするが、発掘調査による資料は乏しく現時点では収拾品を拠り所としている。刺

突文や長脚の高坏、二重口縁土器、剣加重器（把頭）が主な構成要素である。朴淳發（二〇〇四）はこれに遼北一帯の資料を加えて起源地の様相を整理したが、新民県公主屯后山遺跡がわずかな資料的根拠となるに過ぎず、個別には類似性を探ることもできるが、セットとしては確認できない。時期も不安定である。それを承知で起源地として積極的に評価した場合にも次のような問題が生じる。

一つは高坏の問題である。涼泉類型の高坏は長脚であることを大きな特徴とし付属的な要素として刺突文をもつ。すると朝鮮の最古段階である空芯短脚の高坏とは異なり、その祖型とはならない。また一つは剣把頭と関わる出現時期の問題である。涼泉類型の剣加重器は斬楓毅（一九八三）の獸乳型で朝鮮の平形i式把頭（宮里 二〇〇九b）の祖型となる。これが粘土帯土器と共に朝鮮南部に伝わったとすると、粘土帯土器文化は細形銅剣成立以前に出現したことになる。⁽⁶⁾ 細形銅剣成立以前のS平形i式把頭が出土した高城松峴里遺跡D区の段階にはすでに粘土帯土器が存在するとみられ、また大田弓洞遺跡1号土坑墓（李康承他 二〇〇六）では粘土帯土器とS平形i式把頭が共存している。剣把頭と粘土帯土器の同時出現および細形銅剣に先立つ粘土帯土器の出現は成り立ち得る。この2つの問題は涼泉類型のセット関係を否定する。起源論には慎重な姿勢が、涼

泉類型には内容整備が求められる。

粘土帯土器文化の出現に関わる問題として、嶺東地域では松菊里型住居と粘土帯土器の出現が同じ段階として捉えられることがある。松菊里型住居の伝播を検討した端野晋平（二〇〇八）によれば、嶺東地域にみられる中央土坑の外側に柱穴が配置される方形住居址は南江流域により多いという。粘土帯土器文化を含めた各要素がどのような過程を経て出現するのか、有溝石斧など時空間的な連続性が確認できる資料を用いながら地域ごとの推移を微細に確認する作業が必要となる。

加えてコマ形土器文化の問題も重要である。中国東北地方とより近い地理的環境にありながら、コマ形土器文化圏を避けるように文化要素が伝わるのはいかにも奇異である。コマ形土器文化は高坏や把手付土器を欠くが、新しい段階には平底長頸壺が出現しており（徐国泰 一九九六）まったく無関係ともいい難い。粘土帯土器文化の出現・展開過程についての研究には各地域文化の研究を総合する視点が必要である。

註

- (1) 胴最大径の位置が上位から下位へ移動するという理解は根強いが（中村 二〇〇八）、서길덕（二〇〇六）は丹念に

資料を検討した結果、時間差を示す属性とはならないと結論づけた。器形が属性となくにくいのは黒色磨研長頸壺の場合も同様である。ただし条件設定次第では成り立つ可能性があるため、地域を限定するなどして遺跡における事実にもとづき検証する必要がある。粘土帯の口縁内側の形態も、円形から三角形への連続的変化として配列することができるが(朴辰一 二〇〇〇、서길영 二〇〇六)、遺跡での多様な在り方はそれらの差異が時間差であることを肯定しない。広域に適用できる時間的属性は少なく、現状で認めた、把手形態や高坏形態も新資料により否定される可能性がある。できるかぎり細かな地域単位を設定しながら、それぞれの差異と遺跡における現れ方を整理していく努力が必要である。

(2) 粘土帯土器文化の諸要素は外来系とみてよいから、李亨源の作業自体は決して無駄でない。問題は未検証の仮説が既成事実化することにある。

(3) 庄田慎矢は炉の位置を「長軸上」と「壁寄り」に区分し後者がより新しく登場すると分析したが、実際には両者を画然と分かつのは難しい。一方で壁付き炉は他と異なる特徴をもつ一群と明確にまとめることが出来る。課題は壁付き炉出現の経緯となるう(庄田 二〇〇九「円形粘土帯土器期の集落構造論(1)——中部地方——」『韓日集落研究会第五回共同研究会 日韓集落研究の新たな視角を求めて 発表要旨集』、六三〇七七頁、書景文化社)。

(4) 坏部の小さい高坏は時期がくだる可能性がある。

(5) 同様の指摘は金海大青遺跡の報告書でもなされた(釜山大学校博物館 二〇〇二)。

(6) すでに李清圭(二〇〇〇)や李昌熙(二〇〇九)が指摘している。いずれも銅剣の型式を根拠とした。

※図は報告書をトレース。写真は報告書を改変。

文献

『日本語』

庄田慎矢 二〇〇九「朝鮮半島南部青銅器時代の編年」『考古学雑誌』第九三巻第一号、一〇三頁、日本考古学会

端野晋平 二〇〇八「松菊里型住居の伝播とその背景」『九州と東アジアの考古学 上巻』、四五〇七二頁、九州大学考古学研究室五〇周年記念論文集刊行会

朴淳發(山本孝文訳) 二〇〇四「遼寧粘土帯土器文化の韓半島定着過程」『福岡大学考古学論集』、一〇七〇一二七頁、小田富士雄先生退職記念事業会

宮里修 二〇〇九a「朝鮮半島の青銅器埋納について」『扶桑—田村晃一先生喜寿記念論文集—』、五〇一〇五二二頁、青山考古学会

李昌熙 二〇〇九「在来人と渡来人」『弥生時代の考古学2』、二〇四〇三四頁、同成社

「ハンブル」

江原文化財研究所 二〇〇七『江陵 芳洞里 遺跡』江原文化財研究所 学術叢書 六一冊

江原文化財研究所 二〇〇七『江陵 芳洞里 遺跡』江原文化財研究所 学術叢書 六一冊

江原文化財研究所 二〇〇七『江陵 芳洞里 遺跡』江原文化財研究所 学術叢書 六一冊

江原文化財研究所 二〇〇七『江陵 芳洞里 遺跡』江原文化財研究所 学術叢書 六一冊

江原文化財研究所 二〇〇七『江陵 芳洞里 遺跡』江原文化財研究所 学術叢書 六一冊

江原文化財研究所 二〇〇七『江陵 芳洞里 遺跡』江原文化財研究所 学術叢書 六一冊

慶南考古學研究所 二〇〇二『陝川 盈倉里無文土器時代集落』
慶南發展研究院 歷史文化 센터 二〇〇五・二〇〇七『泗川 芳
芝里遺跡Ⅰ・Ⅱ』慶南發展研究院 歷史文化 센터 調查研究
報告書 第二九冊

國立夫餘博物館 一九八七『保寧 校成里 집자리—發掘調查中
間報告書—』國立夫餘博物館古蹟調查報告第1冊

宮里修 二〇〇五『無文土器時代의 취락 구성—中西部地域의
駅三洞類型—』『韓國考古學報』第五六輯、四九〇—九二頁、
韓國考古學會

宮里修 二〇〇九b『韓半島 劍把頭飾의 分類와 編年』『嶺南
考古學』第五〇號、五〇—五四頁、嶺南考古學會

金承玉 二〇〇六『송국리문화의 지역권 설정과 확산과정』
『湖南考古學報』24輯、八一—一二二頁、湖南考古學會

朴淳發 一九九三『우리나라 初期鐵器文化의 展開過程에 대한
약간의 考察』『考古美術史論』3、三七—六二頁、忠北大
學校考古美術史學科

朴榮九 二〇〇七『嶺東地域 青銅器時代 聚落構造의 變遷』
『古文化』第六九號、五〇—四〇頁、韓國大學博物館協會

朴辰一 二〇〇〇『円形粘土帶土器文化研究—湖西 및 湖南地
方을 中心으로—』『湖南考古學報』第一二輯、一二五—一
六一頁、湖南考古學會

朴辰一 二〇〇六『서울·경기지방 점토대토기문화試論』『고
고학』第五卷第一號、三一—五〇頁、서울경기고고학회
裴眞晟 二〇〇一『柱狀片刃石斧의 變化와 面期—有溝石斧의
發生과 無文土器時代 中期社會의 性格—』『韓國考古學報』

粘土帶土器文化의 地域의 樣相について

第四四輯、一九—六五頁、韓國考古學會
釜山大學校博物館 二〇〇二『金海大清遺跡』釜山大學校博物
館研究叢書 第二七輯

서길덕 二〇〇六『원형점토대토기의 변천과정 연구—서울·
경기지역을 중심으로—』『先史와 古代』二五、三二七—
三六一頁、韓國古代學會

宋滿榮 二〇〇二『南韓地方 農耕文化形成期 聚落의 構造와
變化』『韓國 農耕文化의 形成』한국고고학회 학술총서2、
九五—一四二頁、學研文化社

李康承·禹在炳·李亨源·梁慧珍·姜胎正·韓辰淑 二〇〇六
『弓洞』忠南大學校博物館叢書第28輯、忠南大學校博物館
李昌熙 二〇〇八『水石里式土器의 再檢討』『考古廣場』3、
一—一九頁、釜山考古學研究会

李亨源 二〇〇五『松菊里類型과 水石里類型의 接觸樣相—中
西部地域 住居遺跡을 中心으로—』『湖西考古學』第一二
輯、一五—三三頁、湖西考古學會

李和種 二〇〇六『江原地域 円形粘土帶土器文化의 特徵과 編
年』『江原考古學報』第七・八合號、六七—一〇二頁、江
原考古學會

中原文化財研究院 二〇〇七『安城 盤諸里遺跡』調查報告叢書
第四五冊

中村大介 二〇〇八『青銅器時代와 初期鐵器時代의 編年과 年
代』『韓國考古學報』第六八號、三八—八七頁、韓國考古
學會

〔中国語〕

靳楓毅 一九八三「朝陽地区発現的劍柄端加重器及其相關遺物」

『考古』一九八三年第二期、科学出版社

肖景全・周向永二〇〇七「遼吉兩省相岭地区早期鉄器時代文化の発現与研究」『遼寧省博物館館刊』第2輯、五二～七

六頁、遼海出版社

辛岩 一九九五「遼北地区青銅時代文化初探」『遼海文物學刊』

一九九五年第一期、四九～五三頁、遼海文物學刊發行部

鉄嶺市博物館 一九九二「遼北東部地区幾処青銅時代遺址調査」

『遼海文物學刊』一九九二年第一期、三一～五三頁、遼海

文物學刊發行部